

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

「スルー王国軍」を名乗る武装集団

山本博之（京都大学地域研究統合センター准教授）

今年3月上旬、「スルー王国軍」を名乗る武装集団235人がサバ州東海岸の村を占拠し、マレーシアの警察と国軍による掃討作戦によって武装集団に多数の死者が出る事件が発生した。これはサバの領有権を主張する「スルーのスルタン」の指示によるものとされ、「サバ領有権」「スルタンの末裔」「イスラム武装集団」などのキーワードで注目を集めた。この事件は全容が解明されているわけではないが、わかる範囲で背景を整理してみたい。

サバの帰属について。1878年、イギリスのデント商会の支援のもと、オーストリア・ハンガリー帝国の香港領事フォン・オーバーベックがスルーのスルタンからサバの権利を得た。契約書に書かれた「パジャック」をスルタンは租借と解釈したが、サバの権利を引き継いだ北ボルネオ会社は割譲と解釈した。北ボルネオ会社は購入代金として毎年5,000海峽ドル（後に5,300海峽ドル）をスルタンに支払い、1963年のサバ独立後はマレーシア政府がスルタン家に毎年5,300リングを支払っている。マレーシア政府は購入代金の分割払いだと考えているが、スルタン側はこれを賃借料と考え、サバ領有権の根拠としている。

割譲か租借かは領有権に関する問題であり、統治権とは切り離して考える必要がある。イギリスからの独立にあたり、コボルド調査団（1962年）と国連調査団（1963年）がサバの住民の意向調査を行い、その結果、サバはマレーシアの一州となった。したがって、たとえスルタンであってもサバで好き勝手に振る舞ってよいわけではない。

では、「スルーのスルタン」とは何者なのか。実は、スルーのスルタンを名乗る人は複数いる。特に昨年11月以降に名乗る人が増え、今回の事件の首謀者であるジャマルル・キラム3世のほか、イスマエル・キラム2世、ムズル・ライ・タン・キラムなど何人もいる。マレーシア政府が毎年支払っている5,300リングは9人の「スルーのスルタン」で分け合っているとも言われている。今回の事件の首謀者とされるジャマルル・キラム3世がスルー王国の唯一の継承者というわけではない。

このスルタンたちは、今日のフィリピンでは政治的にも経済的にもほとんど影響力がない。長く続いたミンダナオ紛争は、昨年10月にフィリピン政府とモロ・イスラム解放戦線（MILF）の間で和平合意が結ば

れ、自治政府組織の樹立などについて両者の交渉が進められているが、スルーのスルタンたちはMILFとは直接関係なく、この和平過程に加わっていない。昨年11月以降にスルタンを名乗る人が増えたのは、この交渉に参加したいというアピールの意味もあったのだろう。また、フィリピン政府とMILFの交渉は、マレーシアがホストとなって今年2月から行われることになっていた。この時期にサバに「兵士」を派遣したのも、マレーシア政府による仲介を期待したためだったのかもしれない。

しかし、この状況を利用しようとする人々の思惑が重なり、事態は不幸な方向に展開した。そもそも武装してサバに侵入したことはまずかったと思うが、それが「スルー王国軍」や「故地への帰還」などの言葉で語られたことが、マレーシア政府に武力鎮圧の口実を与えてしまったように思われる。

マレーシアの与党連合・国民戦線（BN）は、来る総選挙で政権を維持するために鍵となるサバ州の支持を求めており、サバ州が30年以上にわたって求めていた国境警備の強化と外国人増加の原因調査に取り組む必要があった。後者については、ナジブ首相は昨年6月にサバ州の外国人問題の調査委員会を設置していた。そして前者については、今回の事件を契機に、警察と陸海空3軍を動員して国境警備の強化を示した。連邦政府にとっては力強さを示す絶好の機会となり、サバ州の住民の多くは長年の懸案に連邦政府が本腰を入れたと歓迎した。こうしてマレーシア側では連邦政府もサバの人々も満足し、フィリピン側では中央政府とMILFは和平過程が妨げられなかったことに安堵したが、そのために「スルー王国軍」が払った犠牲は大きなものとなった。西部戦線異状なし。

< 筆者紹介 >

1966年、千葉県生まれ。東京大学大学院総合文化研究科修了。学術博士。マレーシア・サバ大学講師、国立民族学博物館助教授などを経て現職。専門はマレーシアの地域研究。サバ州の民族分類やジャウィ（アラビア文字表記）の社会的役割、災害復興時の社会形成など関心領域は広く、東西マレーシアおよび周辺諸国でフィールドワークを繰り返している。日本マレーシア学会（JAMS）運営委員長。